

の周辺で現在も残る道路、町割なども寛永頃までには出来上がっていたことになる。ただ、今回の調査区の北側にある海蔵寺や本性寺などが描かれているものの、海蔵寺通りは描かれておらず、調査区付近は空白で町屋として成立していなかった可能性がある。

図55は、宝永年間（1704～1710年）に描かれた絵図を明治時代になって写したものとされるが、堀、足輕屋敷、寺、町屋などが色分けして克明に描かれている。これには、寛永の絵図にはない海蔵寺の南を東西に走る現在の海蔵寺通りが描かれ、道に沿って町屋の彩色がされており、調査区付近が町屋となっていたことが分かる。また、幕末頃の絵図では闘鶏神社周辺まで町屋が広がっていることから、時代とともに東側に城下町が拡大していることが窺える。

発掘調査では、礎石建物や土坑、埋桶などがみつかっており、これらは町屋にかかわる遺構であると言えることができる。出土する江戸時代の遺物には前半代のものはほとんどなくなり、18世紀以降ものが中心で、なかでも幕末頃のものが大勢を占めている。このことから、調査区付近が町屋として成立したのが18世紀頃であったことが遺物からも窺え、画期を迎えるのは江戸時代でも終わり頃になってからであると考えられる。遺物には日常雑器や生活道具が揃っており、茶道具や基石などの出土もあり、当時の町屋の生活を復元することが可能である。

2. 糖漏について

発掘調査ではⅣ・Ⅴ区で白砂糖を製造する糖漏が3個体出土した。糖漏は漏斗や瓦漏などとも呼ばれるもので、形態は逆円錐台形を呈し、底部には穿孔を有している。国産の白砂糖製造は18世紀前半に和歌山が発祥とする説もあり、徳川吉宗によって生産が奨励された。使用方法等については「天工開物」や「砂糖製作記」から窺うことができ、サトウキビを圧搾して出た汁を煮詰めたものから製造するものである。

糖漏は大阪府泉南地域を中心として出土例が多く報告されており、江戸の尾張藩上屋敷でも出土が知られている。県下では、これまで和歌山市秋月遺跡や御坊市小松原Ⅱ遺跡のほかに田辺市上の山でも出土しており、形態はどれも田辺城下町遺跡のものとほぼ同じである。田辺城下で白砂糖を製造していた記録には行き当たっていないが、小松原Ⅱ遺跡の例では、遺跡近くの橋本太次兵衛家が砂糖の販売に係わっていたことが文献資料から分かっており、地域で砂糖生産していたことが明らかになっている。

県下の発掘調査では、江戸時代を対象とすることが少ないこともあって、報告例が少なく考察を加えるまでに至らないが、これまで県下で



図56 糖漏使用法（天工開物より）

出土した糖漏のうち、田辺城下町遺跡以外のものを図57に紹介しておく。

3. 南紀男山焼

南紀男山焼は、広川町にあった陶磁器窯で焼かれた製品で、窯は文政10年（1827）に紀州藩の支援のもと崎山利兵衛により開かれ、明

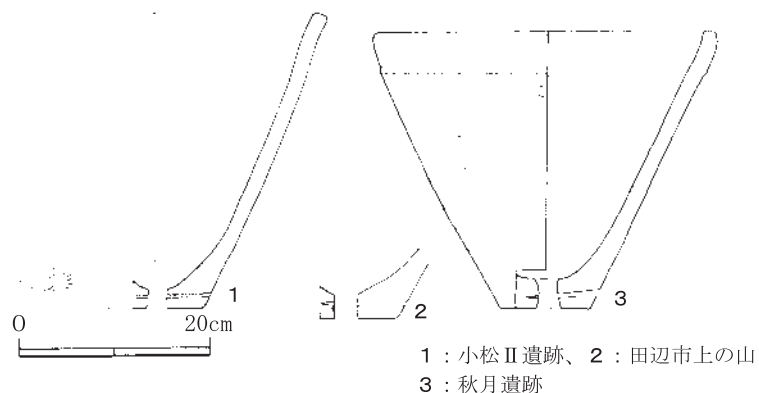


図57 県下出土の糖漏

治11年（1878）まで操業されている。製品の大半は染付であるが、青磁・白磁・交趾写のほか陶器なども焼かれていたとされる。当時の時代背景としては、中国景德镇の染付が衰退し、伊万里焼の需要が急速に増した時期であり、伊万里焼の文様も中国的な傾向を示すようになる。それを受け、南紀男山焼の文様も中国製品や中国模倣の肥前製品を再模倣したもの、肥前系オリジナルを模したものなどがある。南紀男山焼の窯跡から出土した染付群を肥前系の染付群と対比した場合、明らかに識別ができるものの、そのなかで1個体だけ抽出してどちらの製品か判別するのは難しい。このため、窯跡出土の遺物でない限り、「南紀男山」の銘のみで南紀男山焼と判断するしかないのが現状である。南紀男山焼は伊万里製品の流通に係わった箕島の宮崎陶器商人によって、「伊万里」のブランドで大量に京・大阪や江戸に出荷されたとされる。当然地元でも流通していたはずであるが、ほとんどの製品に銘がないこともあって発掘調査で確認された南紀男山焼は和歌山市鷺ノ森遺跡で出土した銘をもつ碗と急須のみである。

今回の発掘調査では、「南紀男山」の銘をもつ染付が2点出土した。1点はⅥ区の攪乱から出土した火入（601）で、底部側面に右から銘が記されている。銘は「南」が大きく左にむかって徐々に文字が小さくなる特徴がある。もう1点はⅤ区遺構530から幕末の土器などとともに出土した芙蓉手皿（497）である。この皿は高台内の二重圏線内に銘を持つが、銘は釘先などの先が尖った金属で意図的に消されている。ただ仔細に見れば、二重の方形枠内に描かれた篆書体の銘が判読できるが、南紀男山焼の製品を伊万里製品と偽るための行為である可能性も考えられる。

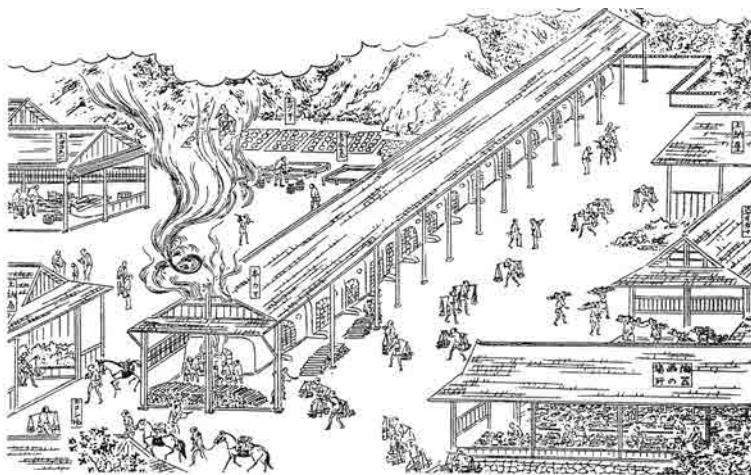


図58 男山陶器場の図

田辺城下町遺跡からは幕末を中